はじめに

磯部 頼子 先生（ベネッセ次世代育成研究所顧問、元全国国公立幼稚園長会会長）

本書作成の趣旨

幼稚園教育の基本は環境を通して行うことであり、その基本に関連して重視することの一つに「遊びを通しての総合的な指導」ということがあげられているのは周知のことです。各幼稚園においては、子どもたちの遊びが楽しく充実したものになるよう工夫し、実践されていることと思います。しかしながら、その努力にもかかわらずなかなかその成果があがらないという悩みや課題も多いと聞きます。このことは「幼稚園は遊んでばかりで何を指導しているのか分からない」「遊んでばかりいて本当に育つのか」という外部からの意見、「遊んでいる時の援助の仕方が難しい」「環境の構成が大事なのは分かるが、何をどのようにすればいいのか分からないし、これでいいのかと不安を感じる」などという実践者の言葉からも推測されます。

実際に、幼稚園での子どもたちの遊びを見てみると、子どもたちは様々な場で自分たちの遊びを展開し、多くの経験をしています。子どもの遊びは子どもの側からすると遊ぶことそのものが目的ということになりますが、立場を代えてみると成長や発達に必要な重要な体験が多く含まれています。この体験の質を保育者が的確にとらえ、そのことを意識して援助していくことが、経験として子どもたちに積み上げられていくのではないかと考えます。

そのためには、子どもたちの遊びを見る視点をもつことがポイントの一つではないかと考えます。そこで、この事例集では、具体的な場面を通して保育の充実につながる視点を「気付きや経験した事柄」として整理してみました。

本書の特色

「ただ遊んでいるだけでは、遊ばせているだけでは教育とはいえない」ということがよく言われます。では、どうあればよいのかということを、実際の子どもたちの活動の場面を分析することから迫ることにしました。

保育者には常に、子どもたちが何に関心をもっているのか、何に意欲的に取り組んでいるのか、あるいは取り組もうとしているのか、どこに困難を感じたり困ったりしているのかを捉えて、見通しのある適切な援助が求められます。

本書の事例は、実際に保育に従事されている先生方に提供していただいた具体的な保育場面を一緒に分析を試み、子どもたちが体験したであろうことを明らかにしたものです。また、実践に基づいたものなので、保育者の動きや言葉もなぜそのようにしたのか、なぜそうするのかという意図まで明確にすることができました。

ここでは、周囲の日常的な環境、保育者が意図的・計画的に構成した環境、子どもたち自身が創り出した環境、保育者と子どもが協力して創った環境など、様々な環境にかかわって生み出された遊びや活動を掲載しています。したがって、環境を構成する視点や子どもたちの遊びのきっかけ作りにも役立つのではないかと考えます。

さらに、本書では資料として次の二つのことを掲載しています。一つは「学びの芽生え」がはぐくまれていくために大切なこと（P8、9）、もう一つは、幼稚園教育要領第２章に示された幼稚園修了までに育つことが期待される事柄と、いくつかの場面で子どもたちが経験したと思われる事柄との関連の図式化を試みたもの（巻末の図）です。幼児期の成長発達は、体全体を働かせて活動することで心身の様々な側面の発達に必要な経験が、相互に関連しあって総合的に促進されていくのがわかります。

巻末の図からも、一つの場面や活動が複数の内容の達成に向かう体験につながっていくことが理解できます。時にはこのような作業をしてみるのも子どもの遊びや発達を理解する一助になるのではないでしょうか。

本書の活用にあたって

１．環境の構成や遊びのきっかけ作りの参考に

子どもたちの遊びを充実したものにするためには、心を動かされる環境、時間や場、共に活動したり共感し合ったりできる人の存在などが重要です。また、行動を起こすきっかけや発展させるきっかけも必要です。その手立てを探る資料となります。

２．子どもの成長発達の理解のために

一人ひとりの発達の実情に応じたきめ細やかな対応が求められていますが、そのためには幼児理解が基盤になります。本書の事例を読み込むことで、その時々の子どもたちの表情や言動から様々な情報を得ることができます。例えば、自分の気持ちの表現の仕方、それに応答する他の子どもの様子などから相手理解の程度や状況の判断、さらに興味・関心の傾向など、様々な側面の発達の状況をうかがい知ることができます。

３．園内での研究・研修の資料として

園内研究・研修を進めるにあたって、具体的な事例での話し合いは有効な方法の一つです。それぞれの園では、具体的な課題をもって研究・研修に励んでいることと思いますが、なかなか自分たちの事例では深く検討しにくい面もあるのではないでしょうか。自分の園とは無縁の事例を思い切り深く分析してみると、気付くことがたくさんあります。また、職員間で共感したり共通の理解を得られたりする場合も多くあります。さらに、事例をなかなか取りにくい、記録のとり方がわからないなどという場合もあると思います。そのようなときの参考資料として活用できます。

４．保護者や地域の幼稚園理解のために

保護者のなかには「遊んでばかりいては知的な発達が遅れるのではないか」「幼稚園では文字や数などをなぜ教えてくれないのか」などと、言葉には出さないまでも感じている人が少なからずいると思われます。幼稚園への理解を深め、信頼を得るためには、子どもたちの姿を通して具体的に説明をすることも必要です。本事例では、「気付きや経験した事柄」として、子どもたちの姿から遊びの大切さを説明できる「質」を明確にしていますので、各園での子どもの遊びの質を洗い出す参考になると思います。

５．幼稚園と小学校の滑らかな接続のための資料として

幼稚園と小学校の関連を考える時、発達の連続性を考慮することの重要性はよく言われることですが、学びの連続性も忘れてはならないことの一つと考えます。また、幼児期の豊かな経験は小学校以降の学びの基盤づくりとして大切なことと考えます。近年、「小１プロブレム」と言われますが、その具体的な姿として「授業中席についていられない、集中できない」「話を聞けない」「集団行動がとれない」「友達と遊べない」「勝手な行動が多く、トラブルが起きると泣きわめいたりパニック状態になる」「注意されても受け入れられない」などがあげられています。これらの状況はなぜ起きるのでしょうか？様々な要因があるでしょうが、その一つに幼児期の経験も大きくかかわっているのではないかと考えられます。具体的には、本書の事例にあげたような経験が十分でない、あるいはしてはいても意識的に指導や援助がなされないので、幼児に経験として定着されないということがあるのではないでしょうか。教師が「この場面では何が経験できるのか、あるいは経験したのか」を意識することが指導や援助の際、大切になります。そのことを明確にしながら、子どもたちの遊びの様子を小学校の教師に伝えていくことが幼稚園教育の理解を深めることになり、滑らかな移行につながるものと考えます。

本書の事例からも言えることですが、子どもの学びは知的な面ばかりでなく、多岐にわたっています。幼児期は分化せずに総合的に指導していくことの意味や意義を伝えるのに役立つものと考えます。

遊びを通して育つことが期待できる資質や能力

心情的側面

- 愛着
- 人への信頼感
- 思いやりの気持ち
- 憧れ
- 挑戦意欲
- 自己コントロール
- 責任感
- 自己充実感
- 集中力
- 達成感、満足感
- 自信
- 自尊心
- 自己有能感
- 許容力
- 忍耐力
- 規範意識

身体的側面

- 健康な体
- 持久力
- 瞬発力
- 柔軟性
- 巧緻性
- 平衡感覚
- 敏捷性
- 協応性
- リズム感

知的側面

- 思考力
- 判断力、決定力
- 物の認知
- 理解力
- 因果関係の理解
- 試行錯誤
- 洞察力
- 予測する力
- 見通す力
- イメージの蓄積
- 好奇心
- 創造性の広がり
- 探究心
- 表現力

社会的側面（コミュニケーション能力）

- 言語の獲得
- 相手とやりとりをする
- 相手のよさに気付く
- 相手の思いに気付く
- 自他の認知
- 状況の察知
- 自己を表現する力
- 人との調整力（妥協、了解、納得など）
- 手順やルールの理解
- 共に生活するためのマナー

技能・能力などの側面

- 簡単な技能の習得
- 材料、用具を選択する力
- 道具の操作
- 運動能力の高まり
- 時間や空間の認知
- 生活習慣の獲得
- 文字、数への興味
- 情報の収集と活用
- 構成力
- 自己理解

学びの芽生えがはぐくまれていくためには

魅力ある環境や不思議な現象、事象などとの新鮮な出合い、新たな発見の喜びと驚き、疑問追究のおもしろさや解明の感激、やり遂げた満足感と充実感など、幼児は遊びの中での体験を通して学びの芽をはぐくんでいきます。しかし、出合いがあれば豊かな体験になるかというと、必ずしもそうとは限りません。やはり、幼児自身の諸側面の育ちもかかわりをもちますし、また、周囲の環境や人の存在も大きな影響を及ぼします。この両面がかかわりあって展開される遊びが、その育ちをいっそう促進します。さらに、その積み重ねがその後の体験を豊かなものにしていきます。このサイクルを繰り返すことで、学びの芽ははぐくまれていきます。そのためには次のような子ども自身の育ちや背景があり、そして体験を重ねることでそれらがいっそう豊かに育つようにしていくことが大切です。

＜幼児自身にかかわって＞

◆他の人との信頼関係が構築されている

・保護者の愛情に支えられて、安定した生活を展開できている
・人への愛着が形成されている
・安心して自分を表すことができる
・周囲の環境や人に興味をもち、素直にかかわれる
・他の人の考えや意見に素直に耳を傾けられる
・自信をもち、自己肯定感が育っている

◆感性が豊かで、自分なりにさまざまな感動体験をしている

・身近な環境に興味関心を示し、進んでかかわれる
・身近な環境や事象・現象などの変化に気づき、関心をもってかかわれる
・些細なものにも心を動かし不思議さを感じるなど、柔軟な感性をもっている
・自分からかかわって追究していく面白さを体験している

◆自分の気持ちや思い・考えを素直に表現できる

・自分のしたこと、言ったことが受け入れられたうれしさを体験している
・友達や他の人の言動に興味関心をもっている
・人とのかかわりに必要な言葉が育っている
・自分の気持ちや考えを相手にわかるように伝えられる
・他の人が自分にとって必要な存在、大切な人であるという実感をもっている

◆社会生活に必要な習慣や態度が身についている

・他の人と心地よく生活することの楽しさを経験している
・していいことといけないことがわかっている
・周囲の状況が判断でき、自分がするべきことをわきまえて行動できる
・協力して活動する楽しさと、自他の存在の重要性がわかっている

◆主体的に物事に取り組む意欲や構えが育っている

・自分なりのめあてをもって取り組む楽しさや、やり遂げた満足感を体験している
・試行錯誤を繰り返しながらも、やり遂げようとする集中力が育っている
・自分で考え判断し、決定、行動ができる
・失敗と成功を程よく体験している

＜周囲の環境や人にかかわって＞

右の図は、幼児の遊びと環境との関係について考えたものです。幼児の遊びはまず、幼児自身が自分のやりたいものがあるかどうかにかかっています。幼児は自分の体を駆使して遊びを作り出す名人ではありますが、その際、「もの」があればイメージや動きが豊かに広がり、楽しさは増すと思われます。また、遊ぶ「場」があれば落ち着いて遊びこむことができ、「時間」が保障されていればじっくりと追究することも可能になります。

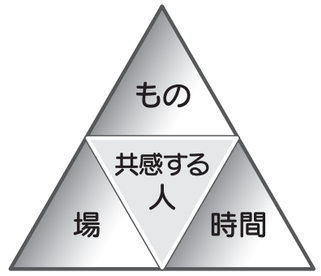
しかし、それだけでは充実感や満足感が十分得られるとは限りません。遊びの場にともに喜んだりおもしろがったりする人、共感したり承認・賞賛してくれたりする人など、「人」の存在が大きくかかわっています。ここでは「人」を、子どもと大人として考えています。文中での「大人」は保育者が中心ではありますが、両親をはじめ身近な大人も視野に入れています。以下に主として考えておきたい事柄のみを記述します。

◆魅力的な環境との出合いが期待できる状況が整っている

・成長発達に即した教材・用具、その他の環境が用意されている
・季節の変化が体感・体験できる自然環境が身近にある
・イメージや目当てが実現できる状況が整っている

◆楽しいことを考えたり発見したりする魅力ある友達がいる

・魅力的な動きをしたりイメージをもつ友達がいる
・新たな目当てとなるモデル的な存在となる友達がいる



◆おもしろさや楽しさを共有・共感するなど、応答してくれる人がいる

・偶然のできごと（現象や事象）のおもしろさを共有できる友達や大人がいる
・自分が発見したこと、考えたこと、遊んでいることに興味を示す友達がいる
・自分の発見や考え、イメージに共感してくれる友達や大人がいる

◆自分のペースで取り組める時間や場が保障されている

・一人でも数人でも取り組める場が保障されている
・自分たちのペースで遊びを進められる自由度がある

◆学級のなかに、一人ひとりが自分のめあてを追究できる雰囲気がある

・学級の仲間関係が育っている
・友達の取り組みを温かく見守ったり応援したりする姿勢が育っている
・友達の成功や成果をともに喜び合える育ちがある

◆さまざまな取り組みを支え、応援してくれたり、承認・賞賛してくれる大人がいる

・取り組みの意味や価値を明確にし、伝えてくれる大人がいる
・どこがどのようによかったのかをはっきり伝えた承認・賞賛をしてくれる大人がいる
・戸惑いや挫折など、状況を把握した支援や応援をしてくれる大人がいる